校長室だより

松江東高等学校

第２（72）号

令和５年４月２７日

○「命の尊さ」

※(72) 号の意味は前任校からの通算です。

校長室のプリンターの上に羊のショーンの小さなぬいぐるみを置いています。前回教頭として松江東高校に勤務していた時に、ALT の先生からお土産としてもらったものです。プリンターの上は執務机から目に入りやすく、その愛くるしい表情から、少しイライラしている時などはその気持ちが緩和されます。

あるスーパーで、マトン（羊肉）の売り出しに羊のショーンのポスターを使っているところがありました。精肉コーナーで牛などの写真を見た時には湧かないなんとも言えない気持ちになったことを覚えています。

３月に埼玉県の児玉白楊高校（今年度から児玉高校と合併）へ視察に行きました。この高校は普通科だけでなく、農業系、工業系、環境系の学科もある総合高校で、敷地も大学のキャンパスなみに広い高校です。農業系の実習棟や圃場(ほじょう)などを見学した際の豚舎での説明がとても心に残りました。「豚を飼育しているが、先日１頭を生徒みんなで”とんかつ”にしていただいた。豚の名前はとんかつ･･･」。豚は、産業動物や経済動物とも言われ、その飼育が経済行為として行われる動物です。愛玩動物であるペットとは違います。

漫画「銀の匙」にも同じような話がありました。北海道の帯広にある農業高校で繰り広げられる生徒たちの青春を描いた漫画です。その中に、主人公が子豚に「豚丼」と名付け可愛がるも、最後は帯広名物の豚丼となって主人公たちの胃袋に入っていくエピソードがあります。主人公は割り切れない思いを抱え葛藤し続けます。産卵率の低いニワトリは精肉処理され、豚も雄牛も食肉となるべく肥育されるのが現実です。

「いただきます」という言葉は、料理を作ってくれた方、野菜や魚、肉などの食材に関わっている人など食事に携わってくれたすべての方々へ感謝の気持ちを表すものだとされます。そして、なによりも食材への感謝。肉や魚はもちろん、野菜などにも命があると考え、「いただきます」と言うのが日本の文化です。

筋肉が徐々に衰える進行性の難病で３歳までの命とされるも大学まで卒業。車いすや人工呼吸器を使い、重度訪問介護を受けながら自立生活を送られていた当時 44 歳の海老原宏美さんの最期の講演での言葉。「命の価値は平等という言葉を耳にすることがあるが、命にはそもそも価値はない。価値があるものは、ダイヤモンドのように価値が上がったり下がったりするものである。命に価値があると考えてしまうのは、現代社会が価値を求める社会だからである。役に立たなければいけない、生産性がないといけないというような価値観に縛られている一面があると思う。生きているというだけでも素晴らしいことではないか。屋久杉や富士山は、ただそこにあるだけで、行けば勇気などがもらえる存在である。価値はそもそもあるものでなく、つくられるもの。命はつくるものではない。あるだけで尊い。だから大切。」と話されていました。

その尊い命は、自分自身はもちろん、他者にもあります。動物にも植物にも。自分の、他者の人権を尊重すること、大切にすること、気遣うこと、それが命を尊重することにつながると思っています。

【裏面：松江東高校のグランドデザイン】 **自立への道程 ～小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志～**